

自ら考え、工夫し、伝え合う力を育む保育

1 保育で願う豊かな学びの姿

本園では、幼小中一貫教育を進める中で、初等部前期における豊かな学びの姿について保育実践を通じて探ってきた。以下は、年長5歳児の5月22日から7月9日までの築山の遊びの記録の一部である。泥団子に興味をもち始めた子ども達が、築山から泥だんごを転がしてみたことから面白さを感じ「どうしたらうまくいくかな」とめあてをみつけ、教師が見守る中、試行錯誤しながら協同して「めあて」を実現していこうとした事例である。

●6月7日 園児Aは、数人の友だちと一緒に築山に長い溝を掘り、団子転がしの遊びを始めた。

園児A 「いくよ、3・2・1ゴー！」

園児B 「あれ～？止まった。」

園児たちは、団子が止まった場所に向け寄った。

T 「どうして止まるんだろうね。」

園児C 「わかった！コースの中に草がはえているからじゃない？」

園児A 「草がなくなったらまっすぐ転がるよね。」

みんなで協力して草を取り除いた。

園児A 「もう一回転がすよ。いくよー。」

再び転がすがまた同じ所に止まった。

園児D 「へんだなー。泥が多すぎるからじゃない？コースだって狭いしー。」

園児B 「じゃー泥が邪魔ってことだ。もっと泥を外に出して広くしよう！」

園児たち 「うん出そう、出そう。」

みんながスコップを手で協力してコースの幅を広くした。

園児A 「今度こそうまくいくはず！3・2・1・ゴー」

園児B 「えー、また止まった。へんだな～。」

T 「どうして止まるんだろうね？」

教師は、コースを手で触ってみせた。

園児たち 教師の真似をして、実際にコースを手で触り始めた。

園児D 「あ！この道って下にずっと行ってるけど、ここだけは上に行ってる。」

園児A 「だから転がらないんだー！」

T 「Dちゃん、Aちゃんそれってすごい発見！お団子は上には登っていけないもんね。」

園児A 「わかった。下に下に掘れば転がるんじゃない！」

園児たち 交互に地面に体を横たえ、片目をつむり考えを出し合いながら土を掘った。

園児D 「こっちの方がちょっと高くなってるから右側をもっと掘ってー。」

園児A 「いいよー。」

園児D 「あ！ダメ。あんまり深いと、また上にあがって止まっちゃうよ。」

●その日の学級での集まりの会で、園児A達は団子転がしが成功したことを話した。

園児E 「すごーい！成功して良かったね。」

園児F 「わたし、すごく転がるとこ知ってるよ。教えてあげる。仲間に入っている？」

園児A 「じゃー明日は、みんなでもっと転がるコース作ろう！」

●6月8日 園児Aは築山に登り、仲間と「こっちで試してみようよ。」「ここではどうなるかな？」などと考えを出しながら遊びを続けていった。

この中で次のような経験や学びの姿が見られた。

- ステップ1 ・ ・ 「あれ?」「どうしてかな。」と立ち止まり、自分の考えを出したり友だちの考えを受け止めたりしながら、新しい考えを生み出し実際にやってみようとしている。
- ステップ2 ・ ・ 教師が「どうして止まるんだろうね。」と投げかけをしたことがきっかけとなり、その原因を自ら考えていこうとしている。そして、自分で見つけたことを言葉で伝え合うことでさらに考えを深めていき、目的に向かって行動する意欲につながっている。
- ステップ3 ・ ・ 「〇〇かもしれない。」と考え推測したり、「こっちでしてみたらどうかな」と試してみたり、築山の環境の物理的な条件や違いを取り入れたりしながら、「どうやったら泥団子がよく転がるか。」という課題意識をもち、友だちと力を合わせて実現しようとしている。

このように疑問や不思議さに出会い、環境にかかわって興味・関心をもち主体的に環境に関わる姿や、さらに、自ら考えたこと・見つけたことを言葉で伝え合うことを通して自分の遊びの目的や課題意識をもって取り組もうとする姿、試行錯誤しながら気付いたり、考えたり、工夫したり、確かめたりする姿、また、友だちと同じ目的に向かって考えを出し合ったり、相手の考えのよさを受け入れたりしながら力を合わせて実現しようとする姿を初等部前期（幼児期）の遊びにおける豊かな学びの姿ととらえている。

2 昨年度までの研究の経緯

平成20年度は、子どもが遊びのめあてや願いに向かい、実現しようとして繰り返す遊びの過程を、教師がしっかりと認めていくことで、子どもが楽しさや達成感を味わい、遊びを継続し、そのことが探究していく力を育むということがわかった。

21年度は教師と子どもとのかかわり合いを基盤としながら、友だち同士のかかわりを生かしていくことで、子ども達のより豊かな思考力・判断力・表現力の育成につながるであろうと考えて研究を進めてきた。

その成果として、次のような教師のはたらきかけが大切であることがわかった。

- 子どもの意欲的な姿を認めていくことで、子どもがさらにやる気を湧かせ、最後まで自分達で問題解決するために工夫していくことができた。
- 子どもの素朴な発想や考えを価値づけることで、自分の発想や考えに自信をもち、くじけずにめあてに向かってやり遂げようとする事ができた。
- 一人ひとりとの信頼関係を築くと共に、子ども同士のあたたかいかかわりを広げ深めていくことで、子どもは安心して自分の思いや考えを表現することができた。

3 本年度の研究

(1) 11年間を見通した初等部前期（幼児期）における思考力・判断力・表現力

幼児期の思考力・判断力、表現力を以下のようにとらえている。

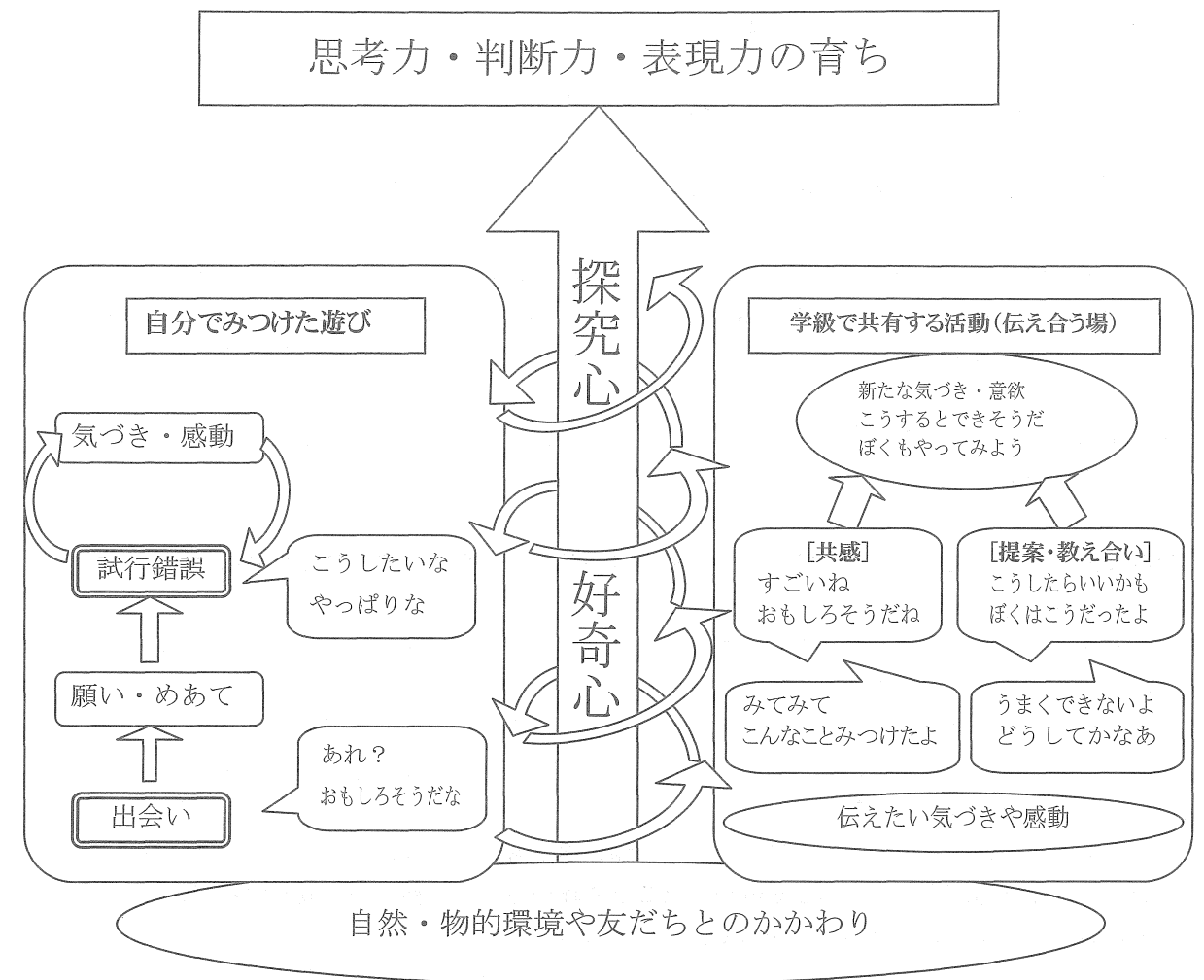
初等部前期 (幼児期)	【思考力・判断力】
	・自ら興味をもって環境にかかわり、驚きや疑問をもって考え、試したり確かめたり工夫したりする。
	【表現力】
	・感じたことや考えたことを自分なりの方法で表したり言葉で伝え合ったりする。

幼児期においては、自分の願い、思い、考えをしっかりともつこと、そして、それを伝えるために表現し、さらに、他者の思いや考えをもち、それを受け止めることが重要な課題であると考えている。

そこで、今年度の研究課題「学び合いをどのように構想するか」について、保育においては、まずしっかりと自分の願い、思い、考えを伝え合うことが大切であると考え、「学級で伝え合う場」をどのよう

に構成すればよいかという課題について研究を進めることにした。

次の図は、保育における思考力・判断力・表現力の育ちをイメージしたものである。



このように、学級全員での「伝え合う場」を通して豊かな学びが生まれるためには、子どもが環境と主体的にかかわりながら遊びこんでいくことから生まれる学びが不可欠であり、その学びを伝え合う場を設定し、一人ひとりの学びを広げたり深めたりしていくことで、子どもの好奇心や探究心が高まっていく。このような場や学びがスパイラル的に高まっていくことが、子どもの思考力・判断力・表現力の育ちへとつながっていくと考えたのである。

(2) 思考力・判断力・表現力を育むための保育の環境の構成

今年度は、一人ひとりの経験や考え・発見したことを伝え合い、友だちと共有していくことによって、さらに豊かな経験や学びとして深めていかせるため、「伝え合う場」をどのように構成すればよいかという課題について研究を進める。

「共有する活動」が生まれるためには、日々の保育の中で子ども達が「このことをみんなに伝えたい」という心を動かす体験が不可欠である。そこで、私たちはまず、「自分でみつけた遊び」が充実するために、次のような環境の構成やはたらきかけを大切にすることにした。

① 「自分でみつけた遊び」の体験が充実するために

【環境の構成として】

- ・子ども達が「あれ?」「おもしろそうだね」「やってみたいな」と興味をもつように、「いつ、何を、

どのくらい、どこに、どのように」を意識して、環境を構成する。

- ・子どもが自分でみつけた興味ある遊びが十分できるような、時間と場所を出来る限り保障していく。
- ・「学級全員で伝え合う場」だけでなく、「自分でみつけた遊び」の中でも、適宜、「一緒に遊んでいる子どもたちで伝え合う場」を設定する。

【教師のはたらきかけとして】

- ・子ども自身が、自分の願いに向かって黙々と試行錯誤する姿を大切に、見守り、見取るようにする。
- ・教師も子どもたちと一緒に遊んでおもしろさを共有したり、教師自身が試行錯誤しながら遊び、子ども達に考えたり、工夫したりして遊ぶ楽しさを伝えたりする。
- ・子どもの思いに寄り添い、子どもの考えや気づきに共感したり、それらを認めたりする。
- ・「どうやったらできたの?」「不思議だなあ。」「〇〇ちゃんはどう?」など、子ども自身が自分を振り返ったり、考えを深めたりするような言葉がけをしていくことで、一人ひとりの子どもの考えをしっかりととらえる。
- ・言葉にならない子どもの思いも子どもの遊びの姿からとらえ、一人ひとりの子どもをしっかりと見取るよう努める。

②学級で共有する活動「伝え合う場」が、経験や学びをつむぐための場となるために

【環境の構成として】

- ・子どもの気もちの高まりや活動の節目など、タイミングをとらえて、「学級全員で伝え合う場」を設定し、気持ちよく集まれるようにする。
- ・子どもの発達段階に合わせ、伝え合う時間の長さ、場所、隊形などを工夫する。
- ・「自分でみつけた遊び」の中でとらえた子どもの姿や思いをもとに、話題の精選を図る。

【教師のはたらきかけとして】

- ・子どもが自分のしたことやがんばったことに満足感がもてるように、結果のよさだけを認めるのではなく、子どもが自分から遊びをみつけたことや願いをもって粘り強く取り組んだことなども認める。さらに、学級の友だちにも伝わるように認める。
- ・遊びや話し合いの中で生まれた発見や気づき・疑問を可視化していくことで、学級全体で共有できるようにする。
- ・子どもの思いや考えが、子どもの言葉だけでは伝わりにくい時には、教師が言葉を添えたり、具体的に尋ねたりして、学級全体で共有していけるようにする。
- ・子どもの気づきに新しい課題を提案し、子どもが新たなめあてをもち、さらに探究心をもって遊びに向かっていけるようにする。

4 成果と課題

子どもの思考力・判断力・表現力を育てていくための「伝え合う場」で、学びをつむいでいくためには、一人ひとりの体験や気づきを学級みんなで共有し、学級全体の喜びや課題にすることが大切であると考えて実践を行った。学びをつむぐための「伝え合う場」ではたらきかけとしては、遊びで生まれた個の発見や疑問を可視化したり、子どもが遊びの中で考えた発想や試行錯誤した経過を掲示したりすることが有効であった。さらに、年長児においては、子ども達の疑問や考えを引き出し、それを整理、追求させていくような教師の声かけをすることで、子どもの追求を持続させたり、発展させたりすることもできた。今後は、一人ひとりの子どもの発達の特性や興味関心の違いによって生まれる学びの内容の違いをとらえ、一人ひとりの経験が認められ、生かされ、遊びのめあてを共有しながら追求する喜びを感じられるような「伝え合う場」の構成の仕方について、さらに研究を進めていきたい。

(文責 岡本 里恵)